



作法／麗氣灌頂私記」と直書。縦二一・〇糎、横一四・八糎。蔵書印は初丁表に「賀茂季栄」の角印、「季」の丸印、丸印（不読）、「國學院大學図書館蔵」の角印。終丁裏に「賀茂」の角印、裏見返しに「賀茂季栄」の角印あり。墨付四十七丁。料紙は斐格混漉紙。本書は、『神道灌頂授作法』（二十五丁）に続いて二十六丁表より『大日本記灌頂略記』、四十二丁表より『神道麗氣灌頂私記』を合綴。

※ ※

本書は、両部神道における神道灌頂の次第及び、そこで用いられる神分や表白文を主として集めたものである。『神道灌頂授作法』には、「神道灌頂法則」「四季之黒符加持」「遷宮事」「口伝」を含む。特に『大日本記灌頂略記』は日本紀灌頂、『神道麗氣灌頂私記』は三輪流神道における麗氣灌頂についてのものである。『神道灌頂授作法』に含まれる「四季之黒符加持」は、疫病退散などのために符を呑む加持であり、「遷宮事」は、地鎮等を行つた後に、神々を新しい社殿に移す作法であり、性質を異にする。

『神道灌頂授作法』の伝来にはいくつかのグループが関与したと思われる。まず、『神道灌頂授作法』内のいくつかの奥書にみえる真海、寅清、千貞房の属する東大寺堂衆である。これらの人物は十六世紀後半から十七世紀初頭にかけての人物であり、『神道灌頂授作法』を書きつぎながら相

伝したと考えられる。また、「口伝」の奥書には、「高野山住人貧士栄泉房 宥任」が千貞房の了承を得て書写した事が記され、高野山の住人が関与している。次に、本書の所持者であり、全体を通して見える賀茂神道講中と、それに属する英頭や賀茂季通・季栄である。賀茂神道講中がいかなるグループであるかは不明であるが、奥書から、慶安二年（一六四九）ごろに賀茂社において神道書の収集をおこなっていたグループと推定される。奥書から、『神道灌頂授作法』『大日本記灌頂略記』『神道麗氣灌頂私記』は、元禄六年（一六九三）に賀茂季栄によって、書写され、合綴されたものである事がわかる。このことから、『神道灌頂授作法』は、南都（東大寺）から高野山住人の手を経て京都（賀茂社）へと流入した事がわかり、当時のネットワークの一端を垣間見ることが出来る。

（大東敬明）

【所収本】

伊藤聡・松尾恒一「資料紹介」國學院大學蔵『神道灌頂授作法』『堯榮文庫研究紀要』二二号、平成十二年（二〇〇〇）

【参考文献】

右所収本の解題

一三 神道灌頂授作法

大日本記灌頂略記 だいにほんぎかんちようりゃつき

神道麗氣灌頂私記 しんとうれいきかんちようしき

図書館蔵、目録二輯一七一・一一一―一号。写本一冊。四ツ目綴線装本。表紙は素紙。題簽等の貼紙はなく、中央に「神道灌頂法則／神道灌頂授与